

## 悩める獣医女子達へ

—Winding road を歩き続けよう—

清水かおり<sup>†</sup> (学)コミュニケーションアート大阪コミュニケーションアート専門学校獣医師)



### 1 はじめに：獣医女子達との出会い

最近、セミナーやイベントなどを通じて色々な獣医学系大学の女子学生達と交流する機会が増えてきた。昔と違い、「獣医女子」にもおしゃれでにこやかで華のある人が多くなった。女子に限らず今

時の獣医学生達は、SNS (Social Networking Service：人と人とのつながりを促進・サポートする、コミュニティ型のWebサイト) やイベントを通じて社会人との交流にも慣れ、コミュニケーションの取り方もなかなかそつなくこなせている。ネットを駆使して学校や時には国境でさえ軽やかに飛び越え、獣医学議論もできれば遊びもとことん楽しめる、本当に羨ましく眩しい存在だ。厳しい受験を勝ち抜いてきた自負も随所に見受けられる。そういう学生達なので、さぞかしみんな自分の将来像を揺るぎない自信を持って思い描いているのだろうと思いきや、女子に限って見てみると実際には不安げで弱気な人も少なくない。女性進出も著しい今の動物医療界なのに、である。仕事と家庭との両立は働く女性の永遠のテーマではあるのだが、今時の獣医女子に限っては悩むほどの問題ではないのだろうと勝手に思い込んでいた。ところが話を聞いてみると、まだ学生のうちから、すでにそれが悩みの種という。中には交際中の彼との将来と卒後の就職との間で揺れ動いている人もいて、私にはとても意外だった。とりわけ小動物臨床の道に進みたいと希望する女子学生の大勢は、先輩の経験談や世間の噂を耳にして、憧れの仕事を選んだら女性としての幸せは望めないかもしれないと、かなり将来を悲観しているようにも見受けられた。就職前にすでに夢をあきらめ、手堅い路線に進路を変更することも珍しいわけではないという。

そんな悩める彼女達は、私が臨床獣医師をしていたという、働きながらどんなふうにも配偶者と出会い、結婚や子育てをしてきたのかと皆興味津々で身を乗り出して

くる。どうすれば仕事を辞めないですむのかと相談を受けることもしばしばだ。

長年臨床の世界で働いていたとはいえ、輝かしい業績や名声があるわけでもなく、開業するでもなく、ごく普通の勤務獣医師として、ごく普通の暮らし方しかしてこなかった私ではあるが、もしかしたらそんなごくごく平凡な女性獣医師としての生き方を彼女達に伝えることで、「こんな生き方でも獣医師として続けられるんだ」と安心してもらえ、彼女達自身の将来像に女性として獣医師としての夢と希望を重ねてもらえるのではないかと考えるようになってきた。不安定ではあるが夢とやり甲斐のある勤務獣医師という仕事。世間的には目立たないが獣医師らしさを発揮できる現在の仕事。

実は、私のまわりには大学を出て研修・開業一直線ではないものの、臨床と何らかの形で関わりながら自分らしく輝いている獣医女子がたくさんいる。みんな、結婚や出産、子育てといった人生の節目で立ち止まり、悩みながらも前を向いて、強気でもなく弱気でもなく自分だけの道を見つけて歩んでいる。

そこで今回は、この雑誌の読者ではないかもしれないが、未来を憂う獣医女子学生や女性勤務獣医師達に送るメッセージとして、私と私のまわりの友人のことを少し紹介してみようと思う。

### 2 模索する女性勤務獣医師達

#### (1) 勤務獣医師のWinding road

6年前に退職するまで、私は大学を卒業してからずっと小動物の勤務獣医師を続けてきた。かれこれ20数年になる。最初の3年間は動物病院に連なる院長宅での住み込み研修。その風習は「丁稚奉公」などと揶揄されてもいたのだが、当時はそれが当たり前時代だった。その後は1年間の大学研究生を経て、動物病院に勤務獣医師として就職し、以降ずっと同じ病院で働かせてもらっていた。その間に結婚して二度出産し、子供達も今ではすっかり成人になった。

臨床を目指す女性獣医師達の皆が皆、開業を目指すわ

<sup>†</sup> 連絡責任者：清水かおり (学)コミュニケーションアート大阪コミュニケーションアート専門学校)

〒550-0013 大阪市西区新町1-32-1 ☎06-6578-3520(代) FAX 06-6578-3529 E-mail : k-smz@oca.ac.jp

けではないだろう。女子の人数が増えれば増えるほど、開業なんてしたくないと初めから勤務獣医師を志向する割合も増えてくる。私もそうだった。学生の頃から臨床獣医師に絶対なるぞと心には決めていたものの、ゆくゆく開業しようとは一度も頭に浮かばなかった。心配性で弱気な自分が病院に関わる全責任を引き受けるだけの勇気と根性を、当時は全く持ち合わせてはなかった。

確かに動物病院勤務は忙しい。肉体労働はいうに及ばず、頭脳もまさにフル回転だ。おまけに命を扱う仕事には精神的なタフさも要求される。世間で言われるアフターファイブもゴールデンウィークも違う世界の出来事だ。学生気分が抜けないうちは、この生活は心身に堪えた。「やっと念願の獣医師になれた！」という喜びと「学生時代に戻りたい！」という嘆きの間で毎日を送っていたことを思い出す。大手企業に就職した高校の同級生と自分を比べてみても無駄なことはわかっているが、とにかく自由で優雅な彼女達が羨ましくて仕方なかった。

当時でさえこうなのだから、今の新人獣医師のとまどいは想像に難くない。動物看護師のサポートがあることを差し引いても、身につけるべき知識や技術、こなすべき日常業務の種類と数は当時と比べものにならないくらい膨大なはずである。ましてや人間関係にも疲れやすい現代社会においてである。

就職して1~2年も立たないうちに心身ともに疲れ果てて臨床現場を去る人が後を絶たないと聞くと、本当に残念で仕方がない。先に道を切り拓いた私達世代にも責任があるのでは、と申し訳なく思ってしまう。絶対に辞めるなどはいわないが、臨床獣医師になりたかったのなら、ほんの入り口で引き返してしまうのはあまりにももったいない。

辞めないで続けていたからいえることなのかもしれないが、命を救える喜びも飼い主とのやりとりも、仕事の忙しさも休日の少なさもすべて含めてそれこそが小動物臨床というものだ。もちろん勤務形態には改善の余地もあるはずだ。しかし、おそらくこの先しばらくは勤務獣医師を取り巻く状況は大きく変わりはないだろう。動物医療が進むにつれて命に待たはきかなくなるし、勤務者の仕事量も増えてくる。嘆いていても始まらない。だから臨床獣医師になりたいのなら、そういうものだと覚悟して、初めの2~3年間を「修行」と割り切ってがんばってみてはどうだろう。動物達の命を託されるようになるためのスキルとマインドを育む修行期間。パティシエや板前と同じだ。修行なのだから休日も少ない。修行なのだから叱られる。期限付きの修行と思えば歯を食いしばることもできるだろう。そこまで何とか乗り越えられたら、きっと心のゆとりが少しはできてはいるはずだ。途中で気持ちが行き詰まったら、相談できる誰かを

見つけよう。変に持論をいわないで、そばにいて話を傾けてくれるだけの誰かがいれば、大丈夫、修行はきっとうまくいく。

## (2) 開業への気後れ

最近の女性開業獣医師の特徴は、男性に比べるとその開業スタイルが実に多様だということだ。大きな病院の経営者もいらっしやれば、内科診療のみの方、往診専門、鍼灸専門などと各々の専門性を活かしたオリジナルの活躍をされている。

今ならこんな自分でも、と思う余裕もできてきたのだが、若い頃には自分に全く自信がなく、開業している先輩方はただただ強くて大きな存在だった。私もそうなりたいたと憧れるより、私なんかは絶対無理と恐縮してしまうような方々だった。

持って生まれた器もあるが、先輩方も初めから強い女性だったわけではなく、技術と知識をコツコツと積み上げて、時に弱気な自分を励まして、努力と労力を惜しまずに、喜びも苦勞もしっかりと自分で受け止めてこられたから、あんなに眩しい存在に思えたのだと今ならわかる。

開業なんて無理だと、今、将来を悩んでいる女性勤務獣医師の皆さんがいるのであれば、ぜひ憧れの開業の先生達に直接お話を伺ってみることだ。自分には無理だと初めからあきらめないで、なれる自分を思い描いてみて欲しい。多様な働き方ができる時代だからこそ、チャレンジするだけの価値があるし、実現できる可能性もあなたの前に広がっている。

## (3) Winding roadの道標(みちしるべ)

せっかく歩み始めた勤務獣医師の長い道程で最初に立つのが、「結婚」という道標だ。「結婚」というものは生活者としての人生の当たり前の節目の一つなのだから、男性であろうと女性であろうと結婚と仕事は二者択一ではあり得ない。と、いいたいところではあるのだが、現実にはそんなには甘くない。

結婚を選択すれば、ほとんどの女性は本来の仕事と家事という仕事、仕事を二つ掛け持ちしているような慌ただしさに巻き込まれる。勤務を終えて職場の玄関を出たとたんに、夕食の献立を考える主婦のスイッチが切り替わる。そんな結婚生活を辛いととるか楽しいととるか、それはひとえに本人の気の持ちようである。この切り替えスイッチは実は女性の方が働きやすい。半ば強制的な切り替えではあるもののワークとライフがスイッチでうまくチェンジして、本人も知らないうちにいつのまにかワークライフバランスがとれている。家事は確かに労働ではあるが、自分のワークではなくライフはライフだ。それならいっそ家事を楽しみに変えてしまえば自ずとバランスもとれてくる。結婚とは、忙しくなる生活でなく多彩な暮らしになることである。ものは言い様考え様

だ。

次に出くわす道標は、「出産と子育て」だ。これらはさすがに自分の気の持ち様だけではどうにもならない出来事である。とくに勤務獣医師はせっかく道を歩み始めても、ここで大半の人が離職する。私のように子育てをしながら働かせてもらえる病院はまだまだ少ないのが現実だ。しかし病院側からしてみれば、それも現状では致し方ないことだろう。本人にとってはおめでたい出来事でも、雇用者からすればやはり困った事態なのだ。その認識の違いを頭ではよくわかっているつもりでも、「人に迷惑をかけている」ことの申し訳なさでいっぱいになって、院長に言い出す時はちょっと切ない。

それならむしろ潔く子育ての間は家庭に入る、それも賢明な選択だろう。仕事を辞めてしまうのは、自分自身の敗北ではない。撤退でも逃避でもあり得ない。道を迂回するだけだ。出産と子育てだって重要な社会貢献である。日本の未来に欠かせない女性にしかできない大仕事。だから、悲観せずに堂々とその任務を楽しむことが大切だ。

母親の育児放棄や我が子虐待のニュースが連日のように流れる昨今では、自分に子供が育てられるのかと不安を抱く女性も少なくない。しかし、獣医師に関して言えば、その心配は無用である。子犬や子猫の育児経験がある人は、我が子の育児でも似たようなものだと考えられる。小さな者に対する愛着の感情もすでに立派に育っている。

子育て中に臨床から離れても焦る必要は少しもない。家庭にいても動物医療とはいくらでもつながっていられるから安心して欲しい。むしろ、勤務獣医師時代より時間はたくさん手に入るので、文献をじっくり読んだり、語学の勉強をしたりと日頃できなかったことにも挑戦しよう。私は育児休業中に獣医学書の翻訳アルバイトに没頭した。子供が寝ている束の間に本を開いての集中タイムは、子育てのストレスを忘れられ、獣医学とつながっているという安心感で一石二鳥のひとつきだった。

「その時にできることからやりましょう」これは獣医女子に限らず子育て経験のある仕事を持つ女性が共通して掲げる仕事の極意だ。いい換えれば、その時にしかできないことはその時にやっておくということになる。私も当時はこの言葉にどんなに助けられたことだろう。子育てにはその時にしかできない子育てがあるものだ。その時にこそ得られる母親としての喜びもあるものだ。

子育て期間中に家庭に入ると、社会から取り残されているような気がすると不安がる人が少なくない。私のいたただいた育児休業は正式な制度としてのそれではなかったが、それでもあと数カ月先には職場復帰ができるという事実は大きな希望になり、寝つかない子供を抱えていても泣きたい気持ちにならずにすんだ。

反対にきっぱり仕事を辞めてしまった人は、きっと大きな不安と隣り合わせで子育てしているに違いない。アラサーという言葉はすでに死語かもしれないが、出産退職はこのアラサー後半あたりから増えていく。同期の獣医師がどんどん成長していくこの時期に自分は家で子供と向き合うばかり。獣医師としてのプライドが無職の自分を焦らせる。自分に収入がないという不安さえ知らずに気持ちを重くする。仕事を持ちながら子育てをしている人達とはまた違う焦燥感。おそらく30代では、そんな表舞台に出ない獣医女子がたくさんいて人知れず悩みの日々を送っているのではないだろうか？ 何かの機会を持てるのであれば、そういう女性獣医師達に今しかできないことを楽しんで欲しいと伝えたい。せっかくの子育てをつまらなくと思うのはもったいない。その経験は必ずや将来の自分の強みとなるはずである。

平成19年度から3年間実施された東京農工大学の文部科学省事業委託事業「出産・育児などで休業した女性獣医師のための再教育支援プログラム」はそんな悩める獣医女子にとってまたとない朗報だったということができる。現在は対象が男女関係なく「獣医師の卒後再教育プログラムアドバンスイン農工大」と名称を変えて平成22年以降も継続開講されている。募集人数は少ないものの、忘れ去られていた（と自ら思っていた自信をなくしてしまっていた）女性獣医師達に、自分達にも社会のニーズがあるのだと思わせてくれたと言う点でも、この取り組みの存在意義には計り知れないものがある。今後も各地の大学で同様の取り組みが始まることに期待したい。

### 3 多様に生きる、獣医師として生きる

女性にとって悩み多き臨床獣医師の道ではあるが、時に脇道に迂回しながらもその道をしっかりと進んでいる人達も少なくない。私の友人達もその仲間である。

**A 先生：**大学卒業後動物病院で研修医として3年間勤務した後一旦臨床を離れ、一般企業に2年勤めて結婚を機に関西へ。専門学校職員の傍ら、休暇を利用してながら米国に通い、獣医鍼灸師の民間資格を取得。さらには東洋医学やホリスティックケアの勉強も進めて、現在は専門学校職員と出張専門の鍼灸クリニック院長の二足のわらじをはき、教育も臨床も講演や執筆活動もしなやかにこなしている。

**B 先生：**大学卒業後臨床研修を数カ月で辞め、公務員に。3年単位の移動のたびに一から新知識を勉強する生活に、どうせなら好きなことを勉強したいと40歳を前に退職し、再び臨床の世界に戻る。一からのスタートでとまどいながらも数年経過。現在は、臨床を続ける上で自分の得意分野を探して模索中。既婚。

**C 先生：**大学卒業後1年間動物病院で研修医。2カ月の充電期間の後専門学校職員に。



その後は、動物病院の非常勤獣医師をする傍ら犬の行動学を勉強し、店舗を持たない行動学クリニックを開業。出張しつけ教室や講演・執筆活動など多彩に活動。その間、結婚して小学1年生と生後数カ月の赤ちゃんのママ。2頭の犬と2頭の猫と二人の子供達との日々で獣医師として母親として幸せを感じている。

彼女達に共通しているのは、皆臨床獣医師を目指して歩み始めたものの、研修の段階で道を一度はあきらめてしまった点である。柳のようにしなやかで少々の困難などうまくかわして生きている今の彼女達からは想像もできないが、当時はきっと若さゆえの生真面目さが真っ向からの風をまともに心身に受けさせたに違いない。

人生なんて予測不能だ。思い通りに行かない時は、彼女達みたいに一旦道を降りて回り道すればいいと思う。臨床なんて二度とやりたくないと思っても、離れてみるとその仕事の魅力がわかってくるというものだ。戻りたいと思えばいくつからでも復帰できる。彼女達はアラフォー世代だ。30代を転換期にして新たな生き方を見つけ出した。もちろん努力は必要だ。彼女達も皆人には見えない努力を重ねながら、今の自分にできるやり方で再び臨床とつながりながらそれぞれの道を歩いている。歩きながらも少しずつ、でも確実に守備範囲を広げている。

結婚すると必ずいわれるセリフがある。「ご主人の稼ぎがあるからいいですね」

これほど女性獣医師のプライドが傷つけられる言葉もないだろう。だからどうだ、何がいいの。初めはいちいち癪に障っていたのだが、最近ではこれを逆手にとって、「夫の稼ぎがあるのだから、男性よりものびのびと好きな働き方をしよう」と仲間には言っている。収入をあまり気にしないでいいのなら、働き方の範囲は大きく広がるというものだ。男性獣医師にはできないようなスタイルで多様な働き方を見つけよう。

かくいう私は6年前に訳あって今の仕事に転職をした。自分の人生の中で、大きな分岐点になる出来事だった。今度は、動物系専門学校の職員という仕事。48歳の転職である。学生への授業が主だった仕事ではあるが、家庭に入っている主婦だったら、これからようやく自分の人生を楽しもうかという年齢だ。高校時代の同級生はヨガにエステに忙しいが、私は一から新入社員、研修では電話応対・名刺交換・お辞儀の仕方 etc.、動物病院では知らなくても済んでいた会社の常識を教わった。社会人復帰へのリハビリだ。それが新鮮でおもしろくて、恥ずかしながら勉強になった。

授業を通して私自身が得るものは、学生よりもはるかに多い。

まずは、獣医学の復習だ。教えるためには正しい知識

を得ないとだめだ。臨床検査、公衆衛生、健康管理学に薬理学、基礎の基礎から最新の知見まで自分が知っておかないと始まらない。勉強の日々は続いている。

学生とのやりとりは自分のコミュニケーション力の気づきと向上に役に立つ。「傾聴」の大切さ、「アサーティブな対応」の必要性、今時のコミュニケーショントレーニングで注目されているキーワードが日々の授業に日常茶飯事として浮かび上がる。

教えると言うことは、意味が深い。一生懸命授業準備を整えて一生懸命説明しても、相手がわかっていなければ教えたことにはならなくてただの自己満足に終わってしまう。相手が理解し自分のものにして初めて初めて、教えるという使命が果たされる。「いかにこちらが伝えただけではなく、いかに相手に理解されたか」。これは、クライアントエデュケーションの基本でもあることだ。

働いてみてわかったが、専門学校の教員という仕事には動物病院のそれとの共通点が多くある。実際の治療こそしないものの、対象が飼い主から学生に変わっただけで獣医学知識とコミュニケーションスキルが必要であるし、どんな時でも勉強意欲のベクトルを多方向に向けていられるという点で、臨床獣医師としての誇りと満足度を十分に満たしてくれるやり甲斐のある仕事である。

#### 4 これからの夢

あと数年で定年退職を控えた私には、これからやりたいことが二つある。

一つは、関西における動物医療の模擬クライアントの育成である。獣医学教育におけるOSCE (Objective Structured Clinical Examination: 学生が臨床実習を行う臨床能力を身につけているかを試す実技試験) 中の医療面接実習に協力できる模擬クライアントを育てるボランティア活動だ。動物医療者のコミュニケーションスキルアップに協力することで、絆を大切に動物医療の充実に間接的に携わり続けることが今の私の夢である。

二つめは、獣医女子のサロン作りである。自宅と病院の往復だけで他院の獣医師と交流する機会の少ない女性勤務獣医師達や獣医女子学生達が集まる場を提供し、一緒にお茶や食事を楽しみながら夢や希望や悩みを語り合う、そんなサロンを立ち上げたい。

#### 5 最後 に

私達世代が切り拓いてきた女性獣医師の進む道は、確かにまだまだWinding roadだ。舗装などない石ころだらけのでこぼこ道だ。それどころか、勤務獣医師のそれに至っては何か道だと判別できる「けもの道」くらいのお粗末さだ。道標などままならない。大学に獣医女子学生の人数が増え始めてから30数年近くも経つという

のに全く後輩には申し訳ない切り拓き方だ。それでも道はつけられている。みんなが後からその上を通過して来てくれさえすればそのうち立派な道になる。怖がらずにあきらめずに道を進んで来て欲しい。

臨床の仕事が続けていても、女性らしい日々の営みはやろうと思えば何でもできる。割ける時間は多くはないが、料理だって編み物だって子育てだって楽しめる。ワ

ークライフバランスは、時間の長さのバランスではなく中身の重さのバランスである。女性の部分を削ったら仕事は充実するのではなく、むしろ女性らしい丁寧な暮らしぶりが仕事の中にも反映される。

せっかく女性に生まれたのだから、しなやかにしたたかに獣医師として女性として生きる獣医女子が増えることを期待して拙文を終わりたい。

---